

清武町埋蔵文化財調査報告書 第11集

KAMIINOHARU

# 上猪ノ原遺跡 - 2 -

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書

2003

清武町教育委員会



巻頭カラー図版1 塞ノ神式土器出土状況



巻頭カラー図版2 水迫式土器出土状況

## 序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農地保全整備事業に伴い、平成14年度事業地で実施した上猪ノ原遺跡第2地区の発掘調査概要報告書です。

今年度で8年目をむかえる本事業に伴う発掘調査では、縄文時代早期の人々の精神的な文化に触れられる異形石器や線刻のある土器などをはじめ、旧石器時代から中近世までの多種多様な資料が確認されました。これらの資料の蓄積により、この地域に住んでいた人々の暮らしぶりが少しずつですが解るようになってきています。

今後、これらの成果が学校教育、社会教育の資料や考古学研究の学術資料として広く活用され、埋蔵文化財保護への理解につながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なご協力を頂きました船引地区土地改良区をはじめとする地元の皆様に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

清武町教育委員会

教育長 湯 地 敏 郎

# 例 言

1. 本書は、県営農地保全事業（船引地区）に伴う、上猪ノ原遺跡第2地区の発掘調査概要報告書である。

2. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体	清武町教育委員会
事務局	
教 育 長	湯 地 敏 郎
教 育 次 長	小 城 貝 久
社会教育課長	川 越 繁 美
社会教育課長補佐	岩 切 繁 明
社会教育課文化係長	伊 東 但
調査員	
社会教育課主事	井 田 篤
社会教育課主事	秋 成 雅 博
社会教育課嘱託	富 田 卓 見

3. 図面の作成は井田、秋成、富田、

(以上実測補助員)、宮崎真琴、中村浩亮、高尾佳子

(以上宮崎国際大学学生)、若杉知和(宮崎大学学生)が行った。

4. 遺物・図面の整理は清武町埋蔵文化財センターにて、井田、秋成、富田、若杉、

が行った。

5. 本書に撮影した写真は伊東・井田・秋成・富田が撮影を行った。

6. 本書に使用した記号は以下のとおりである。

SI：集石遺構 SC：土坑（炉穴・陥し穴状遺構も含む） SE：溝状遺構

7. 本書に使用した方位は磁北で、レベルは海拔絶対高である。

8. 基本土層や遺構埋土等の色調は『新版 標準土色帖（1997年後期版）』の土色に準拠した。

9. 本書の作成にあたって以下の方々から貴重なご指導とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

長津宗重・吉本正典・日高広人・松本茂・柳田裕三（宮崎県埋蔵文化財センター）、  
柴畑光博（都城市教育委員会）、森田浩史・金丸武司（田野町教育委員会）（敬称略）

10. 本書の執筆・編集は井田の協力を得て、秋成が行った。

# 目 次

第1章	はじめに	- 1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	立地と環境	1
第3節	調査の概要と基本層序	1
第2章	アカホヤ層上面の調査	4
第3章	縄文時代草創期・早期の調査	6
第1節	縄文時代早期の遺構について	6
第2節	縄文時代早期の遺物について	12
第3節	縄文時代草創期の遺物について	13
第4章	旧石器時代の調査	16
第5章	まとめ	19
調査抄録		26

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2	第9図	炬穴実測図	11
第2図	遺跡周辺地形図	3	第10図	陥し穴状遺構実測図	12
第3図	基本土層模式図	4	第11図	土坑実測図	13
第4図	SC-1実測図	4	第12図	縄文時代早期遺物実測図1	14
第5図	アカホヤ層上面遺構配置図	5	第13図	縄文時代早期遺物実測図2	15
第6図	縄文時代早期遺構配置図	7	第14図	縄文時代草創期遺物実測図	16
第7図	集石遺構実測図1	8	第15図	旧石器時代遺物分布図	17
第8図	集石遺構実測図2	10	第16図	旧石器時代遺物実測図	18

## 図 版 目 次

巻頭カラー図版1	塞ノ神式土器出土状況		巻頭カラー図版2	水迫式土器出土状況	
図版1	上猪ノ原遺跡第2地区全景	20	図版13	SC-8半載	22
図版2	SC-1	20	図版14	SC-12	22
図版3	SI-23	20	図版15	SC-12半載	22
図版4	SI-23半載	21	図版16	SC-19	23
図版5	SI-23敷石	21	図版17	SC-19半載	23
図版6	SI-4	21	図版18	SC-7	23
図版7	SI-33	21	図版19	SC-10	23
図版8	SI-61・74	21	図版20	SC-10半載	23
図版9	SI-87	21	図版21	旧石器時代調査風景	23
図版10	SC-15	22	図版22	上猪ノ原遺跡第2地区出土遺物1	24
図版11	SC-48	22			
図版12	SC-60	22	図版23	上猪ノ原遺跡第2地区出土遺物2	25

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査にいたる経緯

平成7年度より行われている清武町船引地区の県営農地保全整備事業に伴い、事業区の一部に上猪ノ原遺跡が含まれることが確認された。遺跡の取り扱いについて宮崎県中部農林振興局と慎重に協議したところ、耕作土の確保等による事業設計上の理由により、遺跡の大部分がやむを得ず削平されることとなったため、影響を受ける範囲について発掘調査を行い、記録保存をすることとなった。

調査は宮崎県中部農林振興局の委託を受け、清武町教育委員会が実施し、期間は平成13年10月23日から平成14年12月9日まで、調査面積は約15,200㎡である。

## 第2節 立地と環境

清武町は宮崎平野部の南西部に位置している。当遺跡は町の北西部の船引地区に所在し、町内を北西から東へ流れる清武川左岸のシラス台地状に立地する。当遺跡の標高は65m～68mで、調査区外の東側斜面部の中腹においては豊富な水量の湧水地点も確認されている。

近辺には東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われた縄文時代後期や古墳時代中期の堅穴住居跡などが検出された上ノ原遺跡、県営農地保全整備事業に伴い発掘調査が行なわれた縄文時代早期の遺構・遺物を中心に検出されている白ヶ野遺跡・滑川遺跡・山田遺跡・坂元遺跡、また今後調査が予想される下猪ノ原遺跡などが所在している。

## 第3節 調査の概要と基本層序

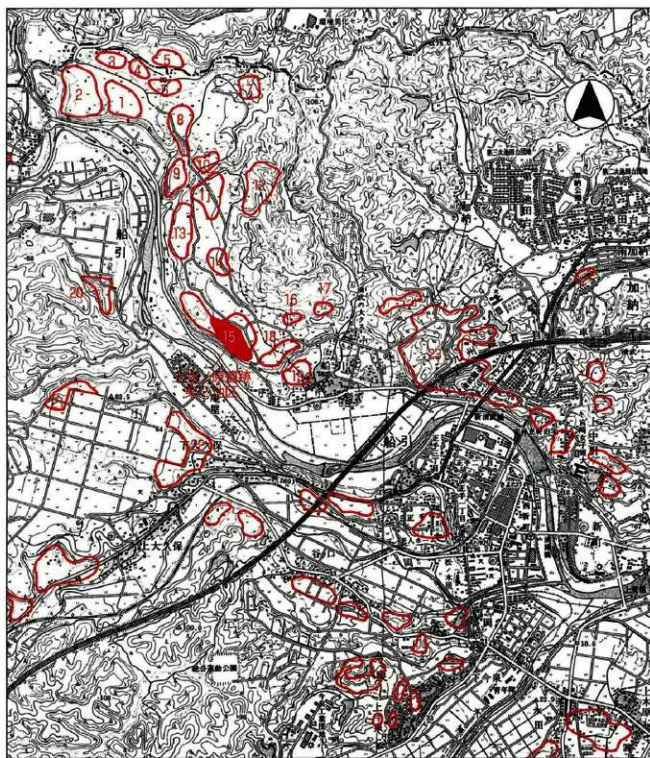
前年度から当事業により上猪ノ原遺跡の発掘調査が行われている。便宜上、前年度調査が行われた部分を上猪ノ原遺跡第1地区、今年度調査が行われた部分を第2地区と設定した。また来年度調査が予定される上猪ノ原遺跡の調査区については第3地区として設定している。

調査は重機による表土（耕作土）の剥ぎ取りから行った。地山は昭和20年前後に行われた畑の造成により、かなりの削平をうけており、2層～10層までが露出している状況であった。表土を除去したところ調査区の中央部及び南西部の2ヵ所で、おそらく霧島小林軽石降灰前に地山が陥没し、窪地になっていたと考えられる場所が確認された。また、その窪地内においては6層の下より、サツマ火山灰（7層）が堆積するという状況が確認された。

表土の除去後、一部2層が残っている部分もあったが、遺物等の混入もみられなかったため3層まで重機で除去し、4層の上面において縄文時代前期以降の遺構の検出作業を行った。その結果、溝状遺構・土坑等が検出されたのでこれらの記録作業を行った。

4層上面での調査終了後、再び重機により4層を除去し5層を露出させ、縄文時代草創期・早期の包含層である6層～8層を人力で掘り下げ、多数の遺構や遺物を検出し、それらの記録作業を行った。

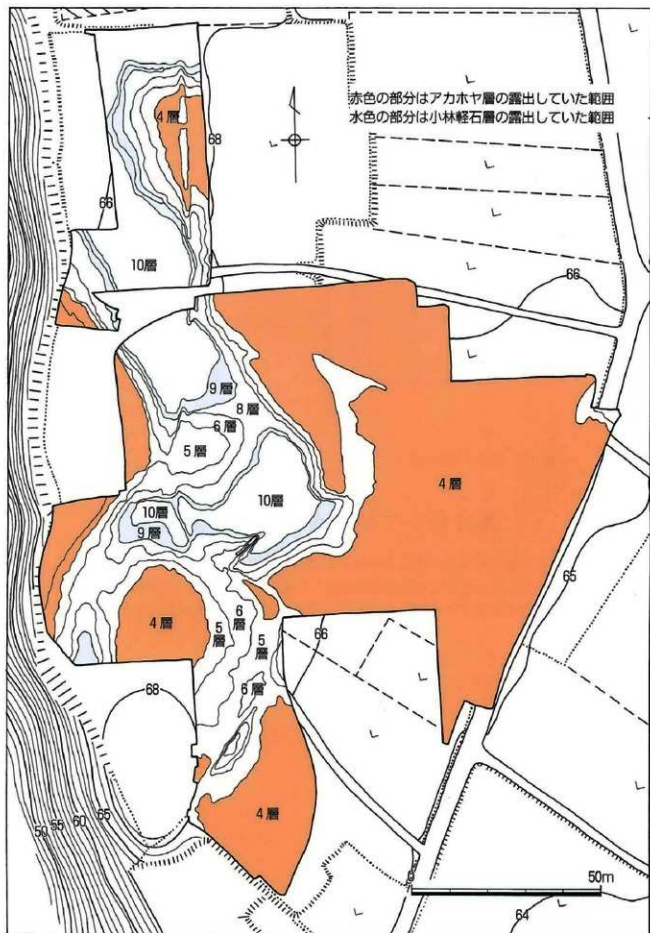
6層～8層の調査終了後、旧石器時代の遺物包含層を確認するためにトレンチを設定し、人力によって9層以下の層の掘り下げを行った。その結果、調査区の南西部に設定したトレンチから旧石器時代の遺物が検出されたため、そのトレンチ付近に旧石器時代の調査区を設定し、調査を行った。



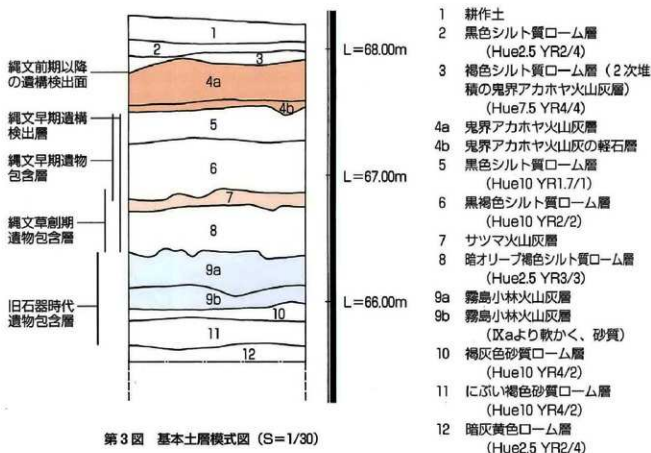
- |            |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 上ノ原第1遺跡 | 2. 上ノ原第2遺跡 | 3. 上ノ原第3遺跡 | 4. 上ノ原第4遺跡 | 5. 白ヶ野第3遺跡 |
| 6. 白ヶ野第2遺跡 | 7. 白ヶ野第4遺跡 | 8. 白ヶ野第1遺跡 | 9. 滑川第1遺跡  | 10. 滑川第2遺跡 |
| 11. 山田第1遺跡 | 12. 山田第2遺跡 | 13. 坂元第2遺跡 | 14. 坂元第1遺跡 | 15. 上猪ノ原遺跡 |
| 16. 札立第2遺跡 | 17. 札立第1遺跡 | 18. 下猪ノ原遺跡 | 19. 園田遺跡   | 20. 権現原遺跡  |
| 21. 杉木原遺跡  | 22. 竹ノ内遺跡  | 23. 溝武城跡   |            |            |

第1図 遺跡位置図 (S=1/25000)





第2図 遺跡周辺地形図 (S=1/1000)



第3図 基本土層模式図 (S=1/30)

## 第2章 アカホヤ層上面の調査

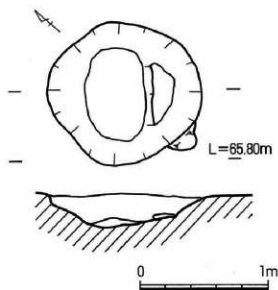
アカホヤ層上面は畑の畝や木の根などの擾乱を激しく受けており、良好な状況で残存していなかったが、遺構検出を行ったところ溝状遺構29条、土坑2基、多数の柱穴が検出された。柱穴については建物跡を示唆するように配列されるものは確認されず、出土遺物を有するものもなかった。

### ■溝状遺構

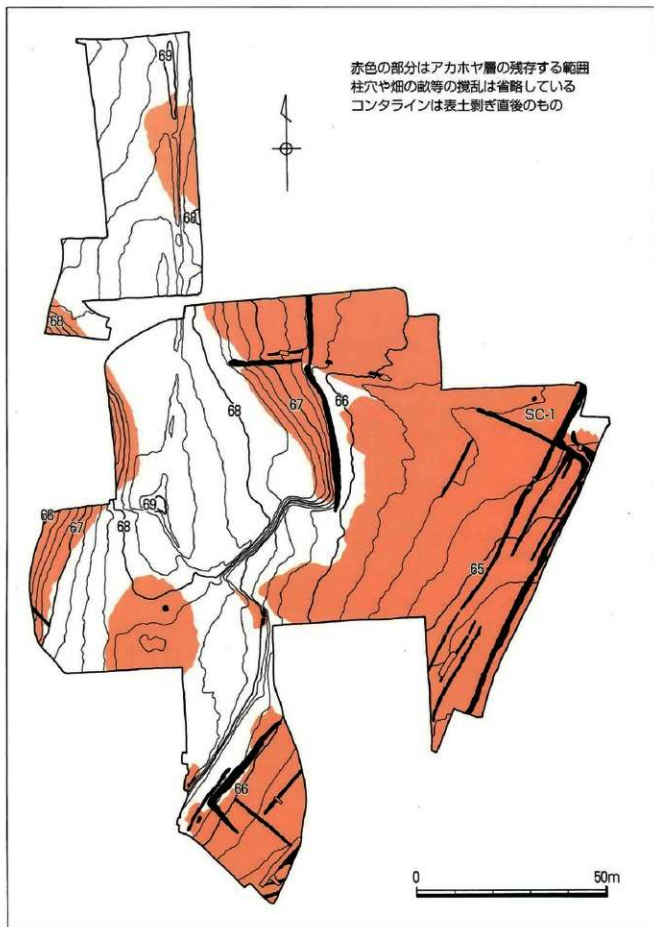
溝状遺構のほとんどが調査区東側から南側の傾斜の緩やかな部分で検出された。切り合うものも多く、ほとんどのものが北東～南西方向を軸にしている。出土遺物を伴うものが少なかったが、かわらけや陶磁器(染付け)の破片が少量出土しているものがあり、中近世または近代に掘られたものがあると思われる。また、埋土中に火山灰を含むものもあり、分析などを通して時期や性格を検討していかなければならない。

### ■土坑

SC 1は1.22m×1.13mの円形プランを呈し、深さは0.26mを測る。南東側に小さなテラスが認められる。出土遺物はなく、埋土中に火山灰等の混入も確認されず時期は不明である。



第4図 Si-1 実測図 (S=1/30)



第5図 アカホヤ層上面遺構配置図 (S=1/1000)

### 第3章 縄文時代草創期・早期の調査

4層上面の遺構調査終了後、重機により4層を除去した。そして鬼界カルデラ噴火直前の当遺跡の地形を把握するため、5層上面における等高線の記録作業を行った。その後、20m×20mのグリットを設定し、縄文時代草創期・早期の包含層である5層～8層を人力により掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。また、調査区の東側は縄文時代早期の包含層の確認トレンチを数ヶ所設定し、掘り下げをおこなったが、ほとんど遺構・遺物が検出されなかったため、縄文時代早期～旧石器時代の調査についてはトレンチ部分のみとした。

5層～7層にかけては集石遺構92基、6層～8層にかけては炉穴38基(切り合っているものは炉部を数えた)・陥し穴状遺構8基・土坑10基が検出された。集石遺構は調査区西部の西側に下る斜面、南西部の窪地の落ち際、南部の東側に下る斜面の三ヶ所において数多く検出された。炉穴は調査区南西部の窪地や南部の東側に下る斜面に多く見られ、それぞれ斜面を利用して掘り込んでいる様子が窺えた。また、陥し穴状遺構のほとんどが調査区の中央にみられ、旧地形において丘陵の頂上付近であったと考えられる部分で検出されている。

遺物は5層～6層にかけては縄文時代早期に該当すると考えられる遺物が多数出土し、6層下位～8層にかけては縄文時代草創期に該当すると考えられる遺物が出土した。

#### 第1節 縄文時代早期の遺構について

##### ■集石遺構

SI23は6層にて検出された。礫の範囲は1.5m×1.2mの楕円形プランを呈し、深さ0.51mの掘り込みの中にU字状に詰まっていた。掘り込みの床面には真ん中に人頭大の礫を2つ置き、その周りをそれより一回り小さな礫で囲んだ0.87m×0.53mの規模を測る敷石がみられた。礫の総数は1686個で総重量は295kgを量る。

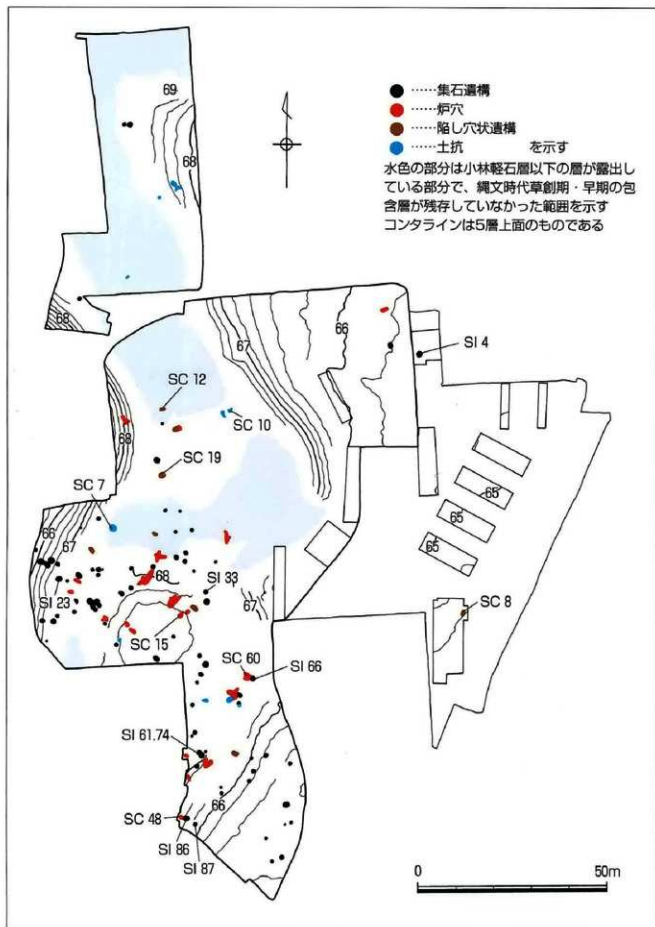
SI4は5層にて検出された。礫の範囲は1.59m×1.55mを測り、深さ0.14mの掘り込みの中に平坦に詰まっていた。敷石はなく、礫の総数は519個で総重量は53kgを量る。

SI33は6層にて検出された。礫の範囲は0.92m×1.11mを測り、深さ0.4mの掘り込みの中に半円状に重鎮している。敷石はなく、重鎮された礫は掘り込みの床面から10数cm浮いた状態であった。礫の総数は427個で総重量は119.5kgを量る。

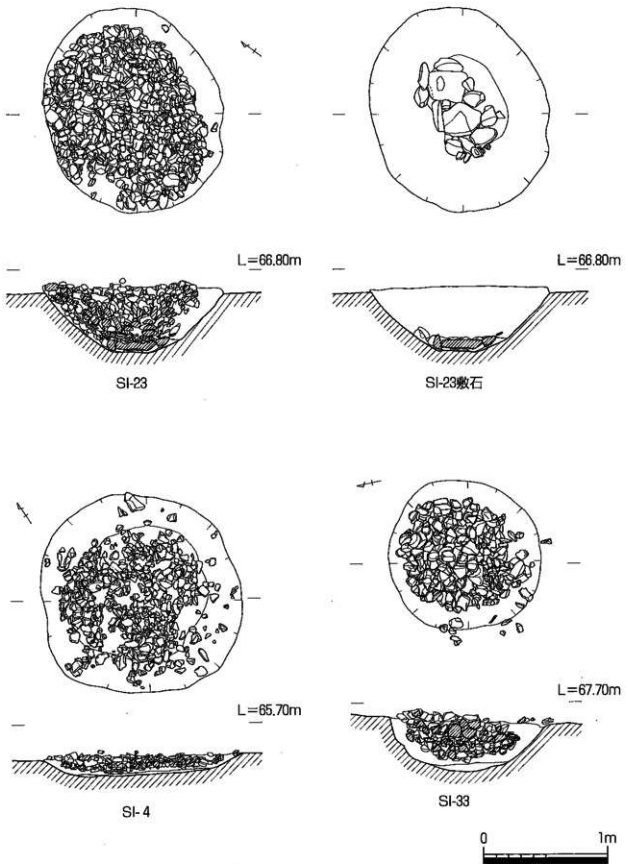
SI61・74は6層にて検出された。礫の重鎮の状況および埋土の観察からSI61がSI74を切っている状況が窺えた。SI61の礫の範囲は1.45m×1.49mを測り、深さ0.33mの掘り込みの中にすり鉢状に詰まっていた。掘り込みの床面には人頭大の礫を4つ円形に配置した真ん中の隙間に拳大の礫2つをおいた状態の敷石がみられた。礫の総数は823個で総重量は138.5kgを量り、平底の土器片の混入がみられた。また、SI74との切りあう付近で礫の下から径1～2cmの炭化物が数点検出された。

SI74の礫の範囲は0.9m×0.9mを測り、深さ0.18mの掘り込みの中に10cm程度浮いた状態でまばらに入っていた。礫の総数は42個、総重量3kgを量り、土器片・剥片が埋土中より出土した。

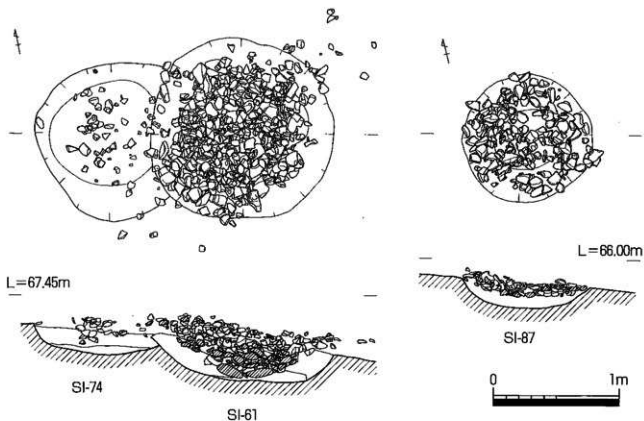
SI87は6層にて検出された。礫の範囲は1.02m×1.02mを測り、深さ0.19mの掘り込みの中に10cm程度浮いた状態で浅いすり鉢状に詰まっていた。敷石はなく、礫の総数は219個で総重量は30.4kgを量る。



第6図 縄文時代早期遺構配置図 (S=1/1000)



第7図 集石遺構実測図1 (S=1/30)



第8図 集石遺構実測図2 (S=1/30)

#### ■炉穴

SC15は6層にて検出された。長さ2.12m、幅1.22mを測る。北東部に深さ0.46m、北部に深さ0.4mを測る掘り込みが見られ、北東部の掘り込みの上部にはブリッジの痕跡が確認された。また床面からは焼土が確認されている。足場の深さは0.31mを測る。楕円押型文の土器片が埋土中から検出された。

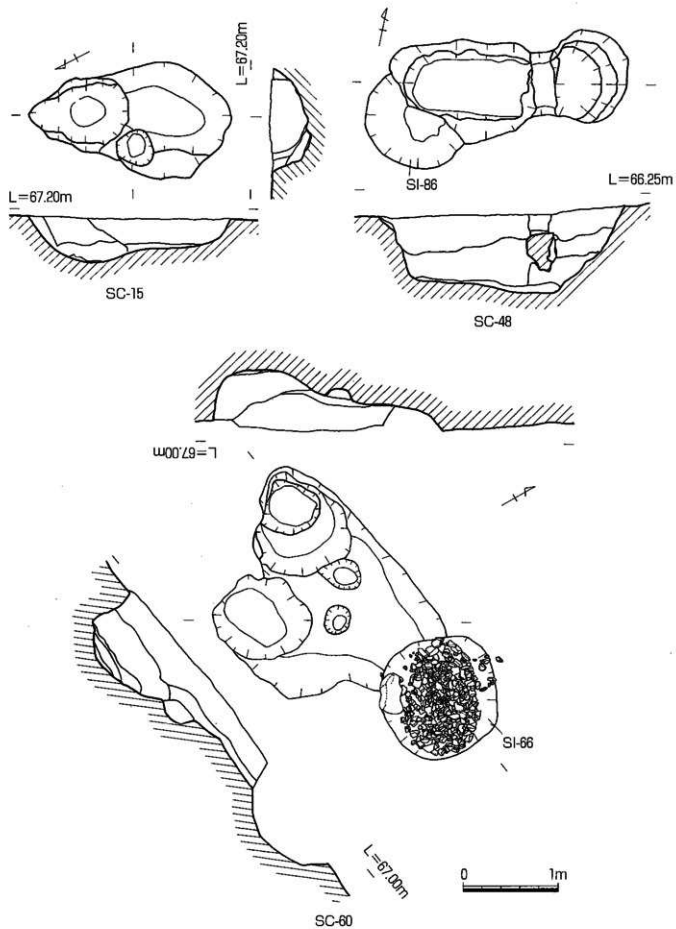
SC48は6層にて検出された。北東部をSI86に切られ、SI86の調査中に認識された。9層の硬い地山を利用してブリッジを作り出しており、良好な状態でその原型を留めていた。また、ブリッジの下からは焼土が検出された。長さ2.4m、幅0.93m、足場の深さは0.72mを測り、煙道部の深さは0.82mを測る。

SC60は6層にて検出された。東部をSI66に切られ、SI66の調査終了後に認識することができた。埋土には礫が多量に含まれていたため、当初は集石遺構と考え調査を進めていたが埋土中や床面に焼土が検出され、炉穴であることを確認した。南西部に深さ0.76m、西部に深さ0.59mを測る掘り込み(炉部)が見られ、それらの床面より焼土が確認された。両方の炉部には柱穴が隣接している。土層観察からは2つの炉部の切り合い関係は認められず、ほぼ同時期に埋まったものと思われる。足場部分はSI66に切られているが、東西方向の長さ1.3m、幅1.1m、深さは0.35mを測る。

#### ■陥し穴状遺構

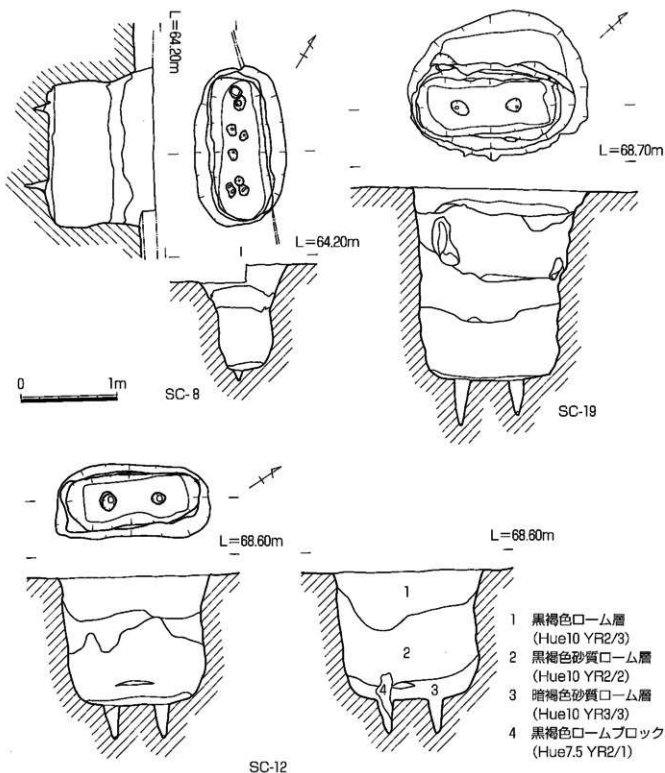
SC8は6層にて検出された。1.64m×0.96mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは1.1mを測る。床面に逆茂木痕が8ヶ所検出された。

SC12は表土を除去後、8層の露出した部分にて検出された。上部はおそらく削平を受けていると思われる。1.58m×0.76mの隅丸長方形プランを呈し、検出面からの深さは1.35mを測る。床面に逆茂木痕が2ヶ所検出されたが、南側の逆茂木痕については調査時の土層観察においてその痕



第9圖 炉穴実測圖 (S=1/40)

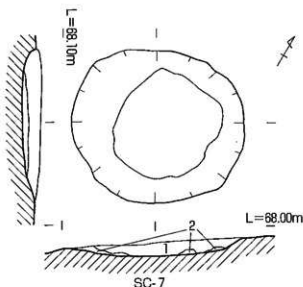




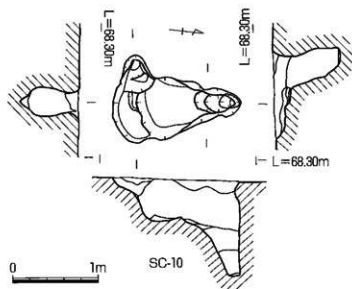
第10図 陥し穴状遺構実測図 (S=1/40)

跡が確認されている。

SC19は6層にて検出された。平面形は1.52m×1.87mの不正円形プランを呈する。北西部に誘い込みと考えられる浅いテラスを有している。陥し穴の本体は1.87m×0.95mの長方形プランを呈し、検出面から床面までは2.03mを測る。床面に逆茂木痕が二つ長軸方向に並んで確認された。また、壁面の抉れた部分が3ヶ所あり、この遺構を掘るときに足場にしたところと考えられる。



- 1 暗灰黄色シルト質ローム層 (Hue2.5 YR4/2)
- 2 オリーブ褐色シルト質ローム層 (Hue2.5 YR4/3)



第11図 土坑実測図 (S=1/40)

### ■土坑

SC7は表土を除去後、9層の露出している部分にて検出された。削平を受けていることも予想されるが、2m×1.8mの不整形円形プランを呈し、検出面からの深さは0.15mを測る。斜面に立地するが床面はほぼ平坦である。埋土の堆積は自然堆積で、埋土中には土器片1点・礫数点の遺物が確認された。

SC10は表土を除去後、8層の露出している部分で検出され、削平を受けていることが予想される。平面形は不整形なL字型であったため、二つの遺構の切り合いを予想して土層を観察したが、切り合い関係を示す土層堆積はみられなかった。南北方向の掘り込み部分は長さ1.49m、幅0.74mを測り、東西方向の掘り込みの長さは1.03mを測る。両方の掘り込みの端部には柱穴状の深い掘り込みが見られた。端部の掘り込みの上部はオーバーハングしており、深さは北側が1.11m、東側が0.79mを測る。また出土遺物は確認されなかった。

## 第2節 縄文時代早期の遺物について

### ■土器

1は口縁部の破片で口唇部に刻み目をもち、その下は沈線文で施文している。2は口縁部の破片である。口唇部に羽状の刻み目を施し、口縁部はくの字に屈曲する。沈線文を口縁部と頸部に巡らせ、縦方向に撚り糸文を施文する。3は全体の1/3程度は残存している口縁部～胴部の破片である。口縁部は波状を呈し、口唇部には羽状の刻み目をもつ。頸部及び胴部には沈線文を巡らせ、その上から縦方向に撚り糸文を施文する。4は胴部の破片である。外面に縦方向の撚り糸文を施した後、沈線文や列点文により文様をつけている。また外面に煤の付着も確認された。5は頸部～胴部の破片である。頸部の下に沈線文を巡らせ、その中に横方向の撚り糸文を施文している。6は底部の破片で幾何学的に沈線文を施し、その上から縦方向に撚り糸文を施文している。7は肥厚帯を有する口縁部の破片である。肥厚帯部分に沈線文と列点文で施文している。8は胴

部の破片である。沈線文と列点文で施文している。9は口縁部の1/4程度の破片で外面に山形の押型文を施している。10は口縁部の破片で、緩やかに外反し、外面に大きめの楕円押型文を内面の口縁部に小さめの楕円押型文を施文する。また、補修孔がみられる。11は口縁部の破片である。口唇部に刻み目を持ちその下には2条のクサビ形突起がみられ、その間に貝殻腹縁刺突文が施されている。12は口縁部から胴部の破片で、口縁部に横位の貝殻押し引き文を施す。13は無文の小型の鉢形土器である。全体の半分程度は残存しており、岡面上ではほぼ完形に復元できる。口縁部は短く外反し、底部は平底を呈する。内面の調整は指押さえの後、その痕跡をナデ消している。外面には指押さえの痕跡が多くみられる。14は口縁部から胴部の破片である。口縁部はわずかに内傾しており、口唇部には刻み目を施してその下には貝殻による刺突文を巡らす。内外面の調整は貝殻によって行われている。15は口縁部から胴部の破片である。おそらく同一固体と思われる底部の破片も出土しているが、現段階では接合できていない。口唇部には刻み目を有し、そのすぐ下に貝殻腹縁刺突文を巡らす。外面の調整は貝殻でおこない、痕跡をナデ消している。16は頸部～胴部の破片である。上部に2条の沈線を巡らせ、工具による刺突や線刻により何かを表現している様に見える。

#### ■石器

17・18はおそらく桑ノ木津留産の黒曜石を使用した小型の石鏃である。19はチャート製の鋳形鏃である。20は玉髄製の帖地型の石鏃である。21は砂岩製の槍先形尖頭器である。両端部を欠する。22はスクレイパーで、自然面を打面とする不定形な縦長剥片を素材として、その一辺に刃部加工を施している。23は片面に自然面を残す横長剥片を素材とするスクレイパーである。節理面によりはがれた上端部付近に加工を施すつまみ部分を作り出し、石匙状を呈する。24・25は片刃の磨製石斧である。24は頁岩の幅の狭い角礫を素材とする。体部の調整は片面にのみ打撃を加え、敲打を行い研磨している。刃部の調整は体部の調整をおこなった面を激しく打ち減らして、両面から磨いて作り出している。25は小型の円礫に両面から打撃を加え、研磨を行い体部の形を整えている。体部調整後、特に片面を激しく磨いて刃部を作り出している。26は打製石斧である。頁岩の円礫を素材とする。素材の厚みを減じるように両面から打撃を加え、体部を整えている。刃部についても両面からの打撃により作り出している。27～29は異形石器である。27はおそらく桑ノ木津留産の黒曜石製で、28は砂岩製である。両者とも羊頭形と呼ばれるものに該当するだろう。29は頁岩製で下部に抉りを持つものである。

### 第3節 縄文時代草創期の遺物について

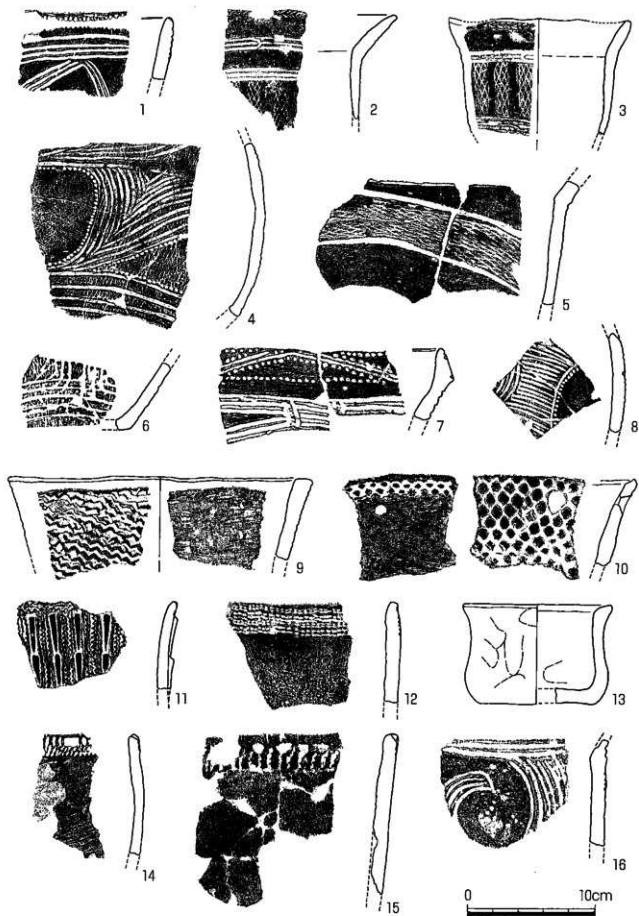
#### ■土器

30～33は爪形文土器である。30は口縁部の破片で、口縁端部を肥厚させ、深い刻み目を施し、そのすぐ下から縦向きの爪形文を施文している。31は口縁部の破片で、斜め向きの爪形文を施文している。また補修孔がみられる。32は胴部の破片である。33は口縁部の破片である。

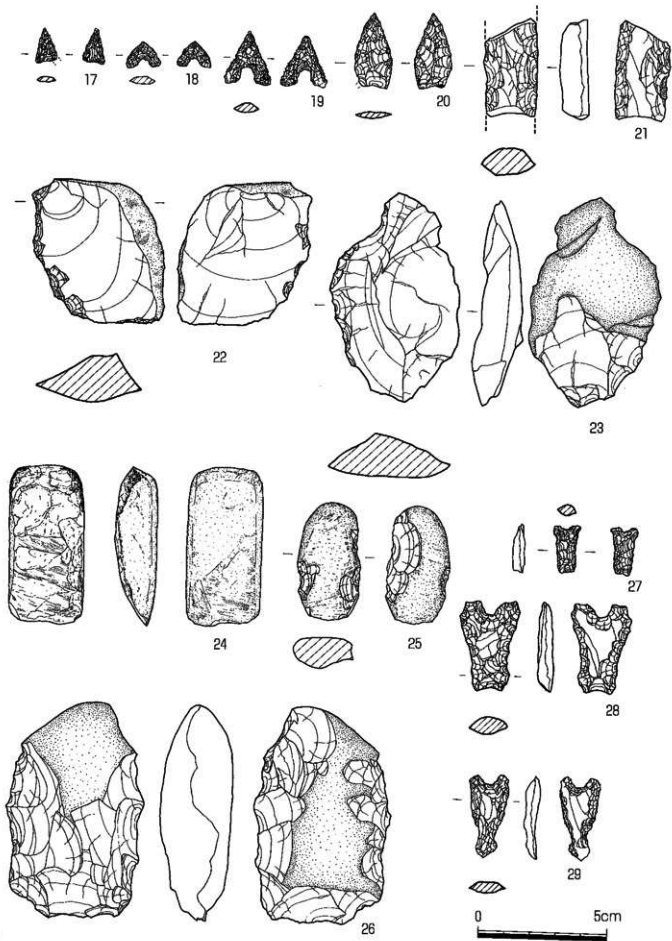
34・35は隆帯文土器で、口縁部から胴部の破片である。両方とも口縁端部から胴部に隆帯を巡らし、その上に貝殻押し引き文を施文している。また34には外面に煤の付着、内面に朱の塗布が認められた。

#### ■石器

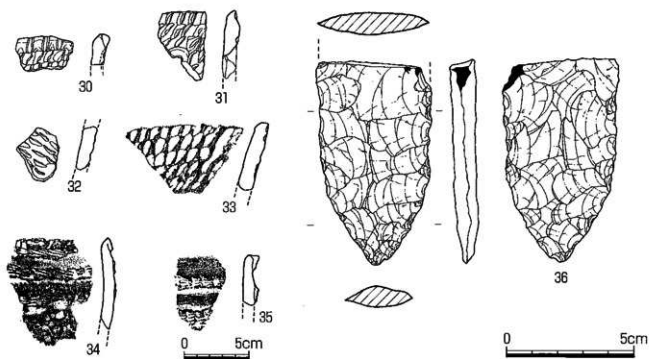
36はサヌカイト系の石材を使用した木葉形の槍先形尖頭器である。表面の色調は青灰色を呈しているが、新しい割れ口は黒色である。先端部から上半部を欠損している。



第12図 縄文時代早期遺物実測図1 (S=1/3)



第13図 縄文時代早期遺物実測図2 (S=2/3)



第14図 縄文時代草創期遺物実測図 (S=1/3, 2/3)

## 第4章 旧石器時代の調査

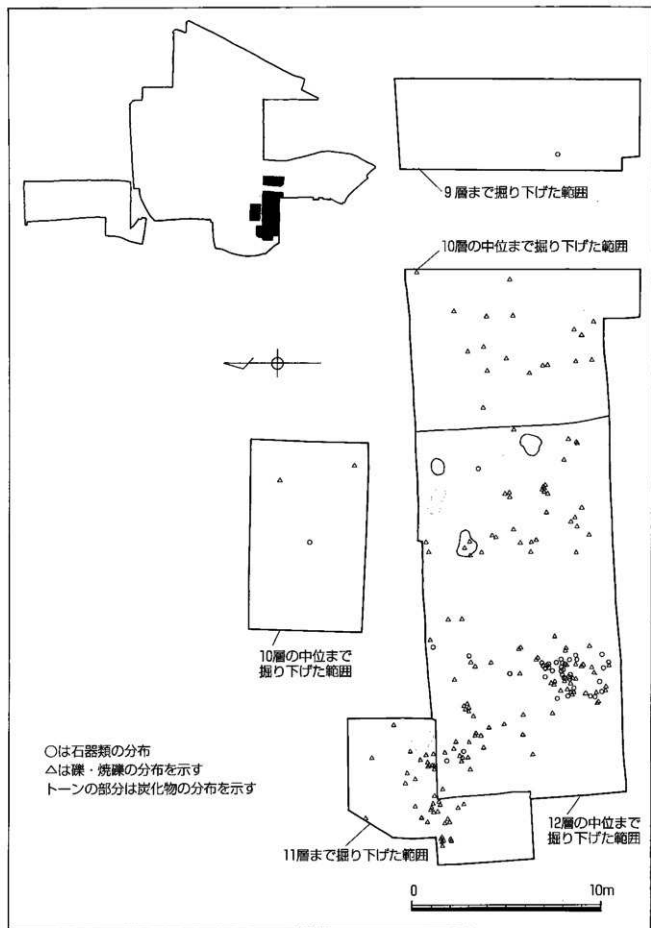
旧石器時代の調査は縄文時代早期の包含層を掘り下げるときに設定したグリットの土層観察のあぜに沿って幅約1m程のトレンチを人力により掘り下げる事から始めた。これらのトレンチからは遺物が確認されなかったため、調査区南西部の7層の確認された窪地部分に約10m×6mのトレンチを設定した。これを人力によって掘り下げたところ、9層から石器が1点、焼礫が2点出土したので、このトレンチ付近に約380m<sup>2</sup>の旧石器時代の調査区を設定し調査期間の期限日まで調査を行った。

遺物は9層～11層にかけて検出された。部分的には12層の途中まで掘り下げをおこなったが、遺物は出土しなかったので包含層は11層までと思われる。しかし、残念ながら調査期間の制限もあり設定した調査区の全てを12層まで掘り下げることはできなかった。

9層から石器12点・礫28点、10層から石器28点・礫122点、11層から石器4点・礫17点が出土した。9層から11層までの間には全く無遺物層がなく、遺物が出土しつづける状況であったため、各層にて文化層を分けることは困難である。また、9層・11層に比べ10層の遺物の出土点数は多く、平面的に遺物が集中する箇所が各層とも同じであることから、10層を中心とする一つの文化層の可能性が考えられる。今後、各層間の遺物や礫の接合関係を整理することによって検討していきたい。

また遺構については11層中において炭化物粒の分布が目立つ場所を2箇所確認した。他にも12層の上面にて不整形なプランを呈する掘りこみが3箇所確認された。

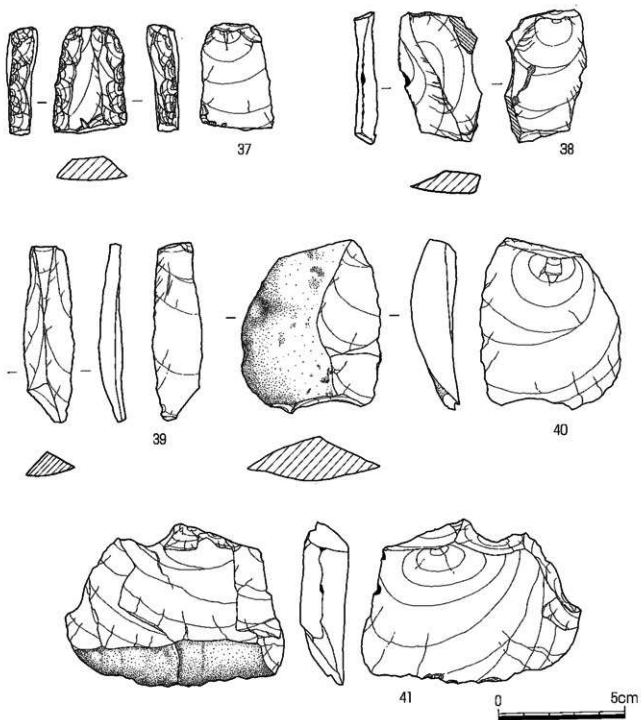
この調査における土層の確認により調査区南西部の窪地は9層が堆積する前頃に形成されたことが判明した。遺物の出土点数の最も多かった10層の段階の地形は西側から東側に向って緩斜面であったと考えられる。



第15図 旧石器時代(9~11層)遺物分布図(S=1/200)

■旧石器時代の遺物

37～39は9層より出土し、40・41は10層から出土した遺物である。37は流紋岩製のスクレイパーである。やや幅広の縦長剥片を素材とし、その両側縁部に主要剥離面側からの丁寧な調整により刃部を作り出している。38・39は頁岩製の縦長剥片である。39は打面部を欠損している。40は流紋岩製の幅広の縦長剥片である。ネガ面に自然面を多く残している。41はホルンフェルス製の横長剥片で、ネガ面の下部には自然面を残している。



第16図 旧石器時代遺物実測図 (S=2/3)



## 第5章 まとめ

アカホヤ層上面の遺構においては当台地上で今までにあまり類例のない溝状遺構を多数検出することができた。しかし、年代も不明なものも多く、また遺構の性格についても道路状遺構・排水施設・境界線などが考えられるが、確証を得るものはない。これからの類例の増加とともに検討していくべき課題としたい。

縄文時代早期の調査では調査区南西部の窪地において斜面に炉穴、頂上付近に集石遺構が立地するという状況がみられ、縄文時代早期における炉穴と集石遺構の分布状況が狭い範囲で明確に分けられた。また、これまで当台地上の縄文時代早期の調査において、検出例のなかった端部に掘り込みを持つ土坑など、新たに検討していかなければならない遺構も確認された。遺物についても平格式土器のような文様の入った壺ノ神式土器や線刻の入った土器、異形石器など当時の精神文化に触れることのできる資料や水迫式と考えられる土器などの新しい資料が増加した。

また、部分的ではあるがサツマ火山灰の平面的な堆積が見られ、確実に縄文時代草創期に該当する資料を得ることができた。このことにより草創期と早期の遺物が混在している6層出土の資料を今後、分類・整理するにあたって役に立つ成果を得ることができたといえる。

### 土器観察表

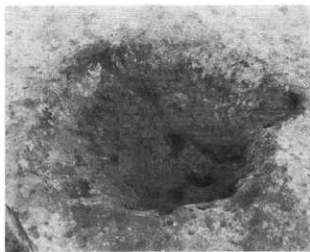
番号	種類	層位	外面の調整及び文様		備考
			口縁部	胴部	
1	壺ノ神式	V	口唇部に連続刻み目	沈線文・蒸糸文	ナデ
2	壺ノ神式	VI	口唇部に連続刻み目	沈線文・蒸糸文	ナデ
3	壺ノ神式	VI	口唇部に刻み目	沈線文・蒸糸文	ナデ
4	壺ノ神式	V		蒸糸文・列点文。縦位に蒸糸文	ナデ
5	壺ノ神式	V		沈線文面に蒸糸文ナデ	ナデ
6	壺ノ神式	VI		沈線文・蒸糸文	ナデ
7	平格式	VI	沈線文・列点文	沈線文	ナデ
8	平格式	V		沈線文・列点文	ナデ
9	山形押型文	VI	口唇部：横ナデ	山形押型文	ナデ
10	山形押型文	VI	口唇部に刻み目	山形押型文	ナデ
11	知恵目式	VI	口唇部に刻み目	知恵目式による斜交文・蒸糸文	ナデ
12	知恵目式	VI	口唇部に貝殻線による押引文	貝殻線による斜交文・蒸糸文	ナデ
13	無文土器	VI		ナデ	風化により不明瞭
14	貝文式	VI	口唇部に貝殻線押型文、胴部に口唇部に刻み目	貝殻線のみ	ナデ
15	水迫式	VI	口唇部に貝殻線押型文、胴部に刻み目	貝殻線のみ	ナデ
16	線刻のある土器	V		横ナデの後、線刻を施している	風化により不明瞭
30	爪形文	VI		爪形文	ナデ
31	爪形文	VI		爪形文	ナデ
32	爪形文	VI		爪形文	ナデ
33	爪形文	VI		爪形文	ナデ
34	押型文	VI		貼付突帯に貝殻線押引文	ナデ
35	押型文	VI		貼付突帯に貝殻線押引文	ナデ

### 石器計測表

番号	種類	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
17	石鏃	VI	1.25	0.85	0.25	0.20	黒曜石	基部をわずかに欠する
18	石鏃	VI	1.00	1.30	0.30	0.20	黒曜石	
19	石鏃	V	2.00	1.80	0.40	0.70	チャート	微彫線・先端をわずかに欠する
20	石鏃	VI	2.95	1.15	0.30	1.20	玉髓	両端を欠損、乾地型
21	槍先形尖頭器	VI	3.90	2.10	1.15	11.80	砂岩	両端を欠する
22	スクレイパー	V	5.53	5.00	2.00	55.50	ホルンフェルス	
23	スクレイパー	VI	8.15	5.00	2.00	59.70	砂岩	
24	磨製石斧	V	6.20	2.90	1.60	52.00	頁岩	
25	磨製石斧	V	4.60	2.50	1.20	18.00	ホルンフェルス	
26	打製石斧	VI	8.50	5.40	2.80	148.40	頁岩	
27	磨製石鏃	VI	1.90	1.05	0.50	0.70	黒曜石	基部部
28	磨製石鏃	VI	3.50	2.40	0.70	4.80	砂岩	基部部
29	磨製石鏃	V	3.20	1.50	0.60	2.30	頁岩	
36	槍先形尖頭器	VI	8.15	4.60	1.60	42.70	サカイト	木葉形・上半部を欠する
37	スクレイパー	VI	5.30	2.90	0.95	16.60	流紋岩	
38	磨製石片	IX	5.30	3.20	0.90	17.30	頁岩	左側基部をわずかに欠する
39	磨製石片	IX	7.00	1.95	0.90	11.10	頁岩	打点部を欠する
40	磨製石片	IX	6.85	5.60	1.70	57.60	地紋岩	
41	磨製石片	X	6.50	8.70	1.80	99.50	ホルンフェルス	



図版1 上猪ノ原遺跡跡第2地区全景



図版2 SC-1



図版3 SI-23



图版 4 SI-23半截



图版 5 SI-23敷石



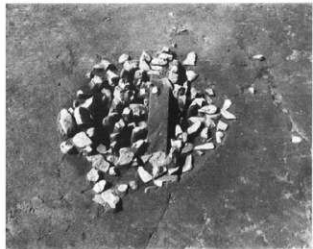
图版 6 SI-4



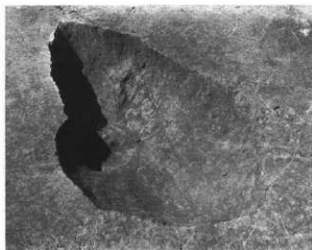
图版 7 SI-33



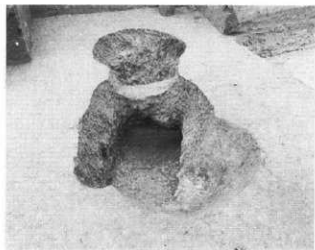
图版 8 SI-61·74



图版 9 SI-87



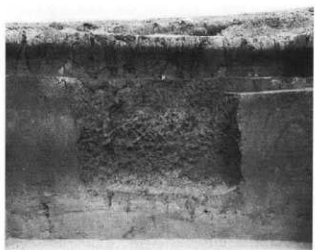
图版10 SC-15



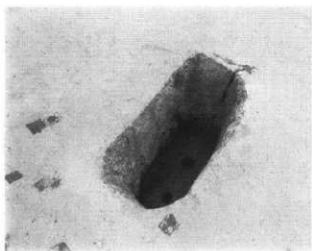
图版11 SC-48



图版12 SC-60



图版13 SC-8半截



图版14 SC-12



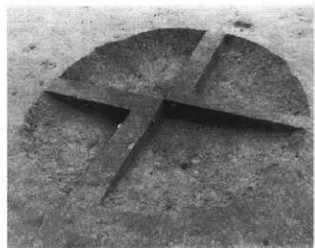
图版15 SC-12半截



図版16 SC-19



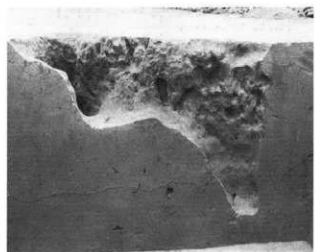
図版17 SC-19半截



図版18 SC-7



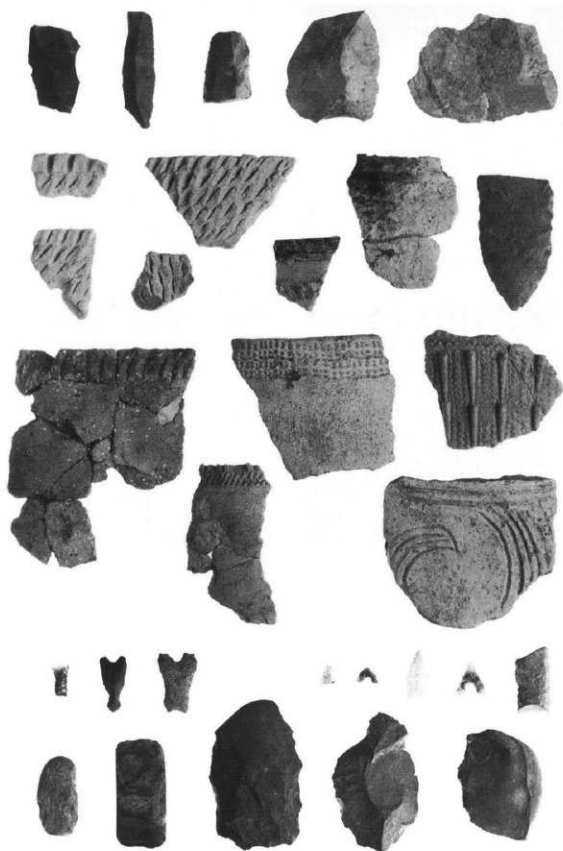
図版19 SC-10



図版20 SC-10半截



図版21 旧石器時代調査風景



图版22 上猪ノ原遺跡第2地区出土遺物1



图版23 上猪ノ原遺跡第2地区出土遺物2

## 調 査 抄 録

フリガナ	カミノノハル				
書名	上猪ノ原遺跡				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書				
巻次	第2集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第11集				
編集者名	秋成雅博				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2003年3月				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東経	調査機関
上猪ノ原遺跡	清武町 大字船引	清武町：205	31° 52' 00" (日本測地形2000)	131° 22' 15" (日本測地形2000)	2001/10/23 } 2002/12/9
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
15,200㎡	農業関連	集落	旧石器 縄文 中近世	集石遺構・陥し穴・炉穴・溝状遺構・土坑など	縄文時代草創期土器・縄文時代早期各種土器・異形石器など
特 記 事 項					



